

新しい仲間 外国人就労生（中国人看護師）を受け入れて

東京 平川病院

平川病院では、海外から看護師や介護職の就労者、技能実習生を受け入れています。

今回は、その外国人就労者のなかの中国人看護師について紹介します。中国人看護師の受け入れは、日本の医療機関への就労を目指す外国人のために、日本語教育、国家資格の取得、入職までを支援するプログラムを利用したもので、当院は2015年から導入を開始しました。同年8月、3年後の新入職受け入れを目指して上海で初めての面接に臨みました。その3年後に当院に入職したのが、2人の中国人看護師でした。その2人をご紹介します。

李 黎 自己紹介

平川病院の内科病棟に勤務しています看護師の李黎と申します。出身地は中国の南北部にある四川省で、パンダの故郷として知られています。

高校を卒業して大学の専門科を選ぶときに、看護師の仕事が好きで躊躇なく看護部を選びました。そして、大学の看護部で4年間を過ごしました。

20歳のときに、「卒業してから、どんな生活をするか」「50年後の自分がどこで、何をしているか」という疑問を持ち、自分はどうしたいか考えました。卒業後、地元の病院で働いて、恋して、結婚して、子どもを育て、やがて年老いて亡くなっていく。こういう人生の流れが目に見えなくなりました。ちょうどそのときに、学校で海外勤務に希望がある学生に関し、日本研修看護師プログラムが行われました。そして、大学の2年目から自分は将来は日本で働きたいと決意し、日本語を勉強し

始めました。平穏な生活がよくないとは思っていませんが、2度目のチャンスがあっても同じ選択をします。

その後、日本語の授業を受けながら看護基本技術、知識を勉強し、2016年に大学を卒業しました。日本語能力試験に合格するために、卒業後、シャンハイで8カ月程度日本語勉強に集中しました。2017年日本に到着。中国の看護師免許証は持っていますが日本では認められないので、2017年から2018年にかけて日本の看護師の資格取得を目指し専門学校で勉強しました。試験準備中、寮、学校、図書館、アルバイト先以外はどこにも行かず、ストレス満々でした。今振り返ってもつらい毎日でしたが、そのつらさのおかげで忘れられない、充実した記憶として残っています。

平川病院職員指導者の初対面の印象

2018年2月、私たちは初めて李さんとお会いしました。もう1人一緒に日本の看護師を目指していた張雪芬さんと一緒に平川病院に面接に来てくれました。張さんは、すでに看護師合格後は平川病院への勤務が決まっていました。中国の上海で大勢いる応募者のなかから看護部長が面接をし、たった1人採用したのが張さんです。張さんと李さんは、寒い冬だったことありますが、東京とはいえ高尾山近くにある当院の寒さと緊張で硬くなっていたように思います。しかし、帰るときにはバイバイと満面の笑顔で手を振るかわいい22歳の女性でした。

アルバイトや学業に苦労していた頃のお2人に

は会っていませんが、このときは、2017年に日本に来て1年で准看護師と正看護師の資格試験を同時に受け、准看護師の資格取得、そして正看護師の合格発表を待っている頃でした。若い2人の話す言葉から慣れない外国で必死に頑張ってきた様子が感じられ、彼女たちをこれから精一杯、温かく迎えようと決意した日になりました。日本に来てたった1年で看護師の国家試験に挑戦して合格したのですから、相当な努力をしたのだろうと容易に想像できます。本来なら、看護師の資格取得までの目標は2年計画ですから、それを1年で成し遂げた2人は、今は当院にとっても自慢の外国人看護師となりました。

再び李さん自身の言葉です

2018年、私は平川病院の内科病棟で看護師として働き始めました。中国で社会人として働いたことはないので、平川病院は私のワーキングライフの原点です。

平川病院に来る前、医療は医師を中心に提供するイメージがありましたが（中国の医療は医師が中心）、平川病院で仕事をしてみて考え方が変わりました。医療は、多職種職（医師、看護師、ケアさん、PT、OT、ST、PSW、歯科医師など）の協力で患者を中心に看護を提供するという考え方に変わったのです。そして外国で仕事するなんてやっぱり簡単ではないと思っていますが、先輩はていねいに教えてくれて毎日喜んで仕事をしています。

当院で中国人の技能実習生を受け入れた頃の2人について

少し遅れた2019年1月に、当院では、中国人の介護職の技能実習生を迎えることになりました。張さん、李さんが入職してから8カ月余り。仕事を覚えるのに2人が一生懸命の時期でした。その技能実習生は、2人と同じように中国の看護師資格を持っており、日本の看護師資格取得を目指していました。彼女は、たった1人で日本へ入国し、1カ月で当院に入職しました。しかも介護職の技能実習生としては日本で2番目ということもあり、日本語もよくわからない技能実習生を、私たちも



戸惑いながら受け入れたのですが、そんな私たちに力を貸してくれたのが、中国人看護師です。

日本人の先輩に教えてもらっているようにと、中国人の後輩の面倒をよく見て、指導をしてくれました。感謝をしている私たちに、中国人の2人は「当たり前です。私たちは日本でいろいろ学んでいるので、自国の後輩の面倒をみるのは当たり前です」と言ってくれました。

2人のLINEでの3年間の振り返り

Rina (張 雪芬) 李さん 日本に来て3年経ちますね。

黎ちゃん(李 黎) もう3年だから慣れて充実した毎日を過ごしているよ。

Rina 李さんが仕事で感じたうれしいことを教えて？

黎ちゃん 先日ね 患者さんにほめられたの！

Rina よかったね どんなこと？

黎ちゃん 親切に悩みを聞いてくれたって。

Rina 李さんは慣れてきている今でも不安なことってある？

黎ちゃん やっぱり言葉の壁ですね。

Rina 私も同じ問題がある。患者様と会話をするとき敬語をうまく使えないとか、医師に報告するとき内容のまとめや整理できないのが一番悩むことかな。

李さんはその問題をどうやって解決してる？

黎ちゃん 日本語の継続的な勉強が必要だよ。本、ニュース、テレビ番組などいろいろな方法



で勉強している。スタッフ、日本人と直接に話す効果が目立つよね。

Rina それは本当にいい方法だねー

私も日本の番組を観るのが大好きです。今は字幕なしでもほぼ意味がわかるようになってきた。李さんは今、具体的にどんな業務をしてるの？

黎ちゃん 病棟に入って3年目だからもう夜勤もしてる。

夜勤は病棟全体の管理と急変時の対応とか。夜勤帯は当直医、管理師長がいるけど、何かあったときどういう対応をするかがちょっと大変。

Rina 私も同感！

夜勤に入ると本当に急変時の対応はどうすればいいのか、せん妄患者様に私の日本語で本当に不安を軽減できるのか、もっと不安にさせるのか、そういうことで仮眠のときも夢に出てくる。こんな業務のなかにも、患者様にありがとうって言われたとき、先輩からも頑張ったねって言われたとき、私の仕事にやり甲斐があるなど思う。

李さんは夜勤の困難をどうやって克服しているの？

黎ちゃん 夜勤帯に嘔吐したり、脈拍が200台に

増加したりした患者さんがいて当直医に報告したときとか、先生に親切に聞かれたり、師長に優しく指導されたりしてすごく緊張してたけど、振り返ってみてよい経験になってると思う。急変とかないと、自分もなかなか成長できないと思うし。

まだいっぱい不足もあるから、自己学習もしていけないといけなくて思ってる。

Rina いい経験だね。

Rina 先輩がこんな言葉をうまく話せない私に、親切に看護師としての姿勢を教えてくださいました。患者様の頭から足元まで観察する。ベッドの高さも留意する。細かいアセスメント方法を教えてくださいまして、優しい先輩がいつも自分の力になってくれます。アルコール依存症の患者様に謙虚な態度で接する提案も、自分にとって本当に助かりました。これからもよい看護師になるよう一生懸命にがんばります。

李さんを中心に紹介させてもらいましたが、張さんのプロフィールを付け加えておきます。

2人はたまたま同じ四川省の出身です。年齢もほぼ同じ。張さんは英語も堪能です。中国で張さんは、看護師ではなく海外に出て仕事をしたいと思っていたそうです。看護学校はお父さんの勧めとか。でもそのお父さんの勧めが結局は張さんを海外での仕事に導き、海外での仕事というだけでなく看護師がとても好きと言っていました。看護師になってよかったと言っていました。

2人の3年間を指導してきた先輩たちにはうれしい言葉です。

平川病院指導者として（看護部長）

李さんも張さんも、3年間の思い出を振り返り、改めて2人でよい看護師を目指して頑張る決意をしたようです。外国人看護師を受け入れた当初は、やはり少なからず両者の間に壁がありました。言葉はもちろんですが、日本人特有の空気を読むことが中国人には難しかったり、日本の食べ物や習慣の違い、ものとのとらえ方・考え方など。ただ経過とともに、彼女たちは自然に私たちの仲間となり、今ではかけがえのない、なくてはならない存

在になっています。

そして改めて今感じるのは、外国人も日本人も同じ。よい看護師になりたいという志を持っている看護師に、その夢を叶えられるような環境を提供し、陰になり日向になり支援するのが私たち指導者の役割。そして、成長した姿を実感できるのが指導者の醍醐味であります。

教育担当者からのコメント（病棟師長）

外国人看護師の印象

2018年4月、看護師としてそれぞれの病棟に配属され、入職当時は緊張した面持ちでしたが、次第に緊張もほぐれ笑顔が増えていきました。李さんはさっぱりとした性格で、切り替えが早くユーモアがあり、張さんはていねいで繊細な気づかいのできる、面倒見のよい性格でした。2人ともそれぞれの病棟ですぐにスタッフと仲よくなっていきました。仕事を覚えるのが早く、真面目に取り組む姿が印象的でした。

受け入れ側の苦労

2人とも日本語検定1級をもっていたこともあり、日本語はおおむね理解していましたが、やはり話すことと書くことは難しかったようです。入職当初はこちらの日本語は正しく伝わっているのか心配し、ゆっくり話すように心掛けたり、難しい言葉はわかりやすい表現を使ったり、伝え方を工夫しました。細かいニュアンスが伝わりづらく、ていねいに説明をした記憶があります。なかでも看護記録は難しく、思っていることがきちんと表現されるよう助言したり、質問しやすい環境づくりをしていきました。中国は漢字の国なので、言葉の意味を理解するのは早かった記憶があります。

事例検討では、患者の看護展開を指導するのに苦労しました。中国では医師を中心とした診療の補助業務が中心となっているため、疾患や薬の知識などはたくさん勉強していましたが、日本のように患者を中心とした医療を提供するうえで、看護の仕事とは何かを教えるのに時間を要しました。

保助看法から看護師の仕事として、診療の補助、療養上の世話として対象患者に必要な看護は何かを共に考えていきました。患者1人に対して多くの職種が関わり治療にあたっていることに驚いていたのが印象的です。

仕事以外でも交流を持てるよう、病院が企画したレクリエーションや職員旅行と一緒に参加してもらい、コミュニケーションをとる機会を多くもてるよう配慮していきました。

職員の反応・影響

中国から看護師を受け入れるにあたり、病棟スタッフは自ら中国の文化の違いなど一生懸命調べて、親しみが持てるように工夫し受け入れの準備をしていました。

李さん、張さんは、看護師卒後1年目ということもあり、プリセプターシップを行い、指導者がていねいに1年間指導にあたりました。日本人の同期の仲間と毎月集合研修を行い、共に学んでいきました。しっかりと勉強する姿勢は、新人看護師の見本ともなり、いい影響を与えていたのを覚えています。同じ病棟にも同期の日本人看護師がいるので、お互い心配なことを確認しながら仕事をしていました。

患者さんの反応

李さんは内科療養病棟、張さんは精神科合併症病棟に配属され、看護師として仕事をしています。患者さんへの声掛けや、笑顔で接する姿は、安心感を与えているものと思います。細かいことにも気づき、国の違いを感じさせないので、患者さんは日本人看護師と変わらず接しています。

外国人看護師への激励の言葉

目標をもってしっかりと前に進む努力家です。自分に厳しく、常に学習する姿勢があるので、今後ますます成長できる人材だと思います。今後自己実現に向けて、国境を越えてのご活躍を期待しています。